

# 「金瓶梅」と楊繼盛

—小説と戯曲との関係から見た—

Chin P'ing Mei (金瓶梅) and

Yang Chi-ch'êng (楊繼盛)

— with reference to some dramatic works —

Takeshi ARAKI

はじめに

沈徳符の「万曆野獲編」のうち、「金瓶梅」のことについて書かれた記事に、以下のような個所がある。

これは（『金瓶梅』をさす）、嘉靖間の大名士の手筆になり、時事を指斥し、蔡京父子の如きは、分宜（嚴嵩のこと）を指し、林靈素は陶仲文を指し、朱勳は陸炳を指し、その他も、各々モデルがあると言われている。中郎（袁中郎のこと）は、「さらに『玉嬌李』なる小説があり、やはり、この名士の手になり、前書（『金瓶梅』）と各々応報因果の關係にあり、武大が転世して淫夫となり、潘金蓮も河間の婦となり、極刑にはてる。西門慶は愚夫となり、妻妾が間男を作つても坐視する。そして、輪廻の違わぬとする話である。」と言っていた

が、中郎も誰かから聞いていたので、まだ（この小説を實際に）見ていないのである。

去年、首都（北京）に行った時、工部の邱志充（万曆四十一年の進士）の所で、たまたまこの書（『玉嬌李』）を見たが、僅かに首巻だけであった。内容は穢らわしく、倫理にも悖つていて、ほとんど読むに忍びない。作中の帝は、完顔大定と称し、また、貴溪（夏言をさす）と分宜（嚴嵩をさす）とが互いに構陷しあうのも暗にこれを寓した部分もある。嘉靖辛丑（二十年）の庶常（庶吉士）諸公に至つては、その姓名を直書しているのは、殊に驚くべきことだ。だからほつておいて再び開いて見ることはしなかつたが、然し、筆鋒は縦横自在を極め、『金瓶梅』より一層勝れているようだ。邱氏が他所に転出したので、この書の行方がわからなくなつてしまつた。（巻二十五、詞曲の条）

これによれば、「金瓶梅」に同じ作者の手になる「玉嬌李」なる続書があつたと言う。大変惜しいことに、この「玉嬌李」はついで出版されることなく散佚し今に伝わらない。

ところで、この沈徳符の記述を信するならば、この「玉嬌李」なる小説は、実に不思議な小説だつたと言わなければならない。なぜならば、「玉嬌李」が「金瓶梅」の続書と言うことであるな

らば、話の時代背景は北宋末あるいは南宋初ということになるはずである。従って、作中に完顔大定と称する金の皇帝<sup>(1)</sup>が登場するまでは、まだ納得できるが、しかし、次に言う内に明・嘉靖年間の大学士の夏言と嚴嵩の政争を暗示する個所があったり、ましてや、嘉靖二十年に庶吉士となった人々の名前が作中に出てくるというのは、一体どういことなのであるうか。

この小説が亡んで今見ることができないので、詰まる所どういことなのか本当の所はわからないが、作品において、何らかの形で南宋初と明の嘉靖年間とが二重写しとなっていたものと思われる。更にこの沈徳符の記述を信するならば、この小説の作者は「金瓶梅」の作者と同一人物だと言うのである。もしそうであるならば、既に「玉嬌李」が二重写しの作品であり、「金瓶梅」も表向きは北宋末の時代の話としていながら、また同時に別の時代のことを二重写しに描いている作品だったとは考えられないだろうか。

もし、「金瓶梅」が表向きの北宋時代のほかに別の時代のことを写した作品だったとすれば、さて、その別の時代とはいつのことであろうか。

実は、「金瓶梅」とほぼ同時代に現われた戯曲に「鳴鳳記」というものがあり、また、清初には、「金瓶梅」と「玉嬌李」を見て書いたと思われる丁耀亢の「続金瓶梅」と、同作者の手になる

戯曲「表忠記」というものがある。このうちの戯曲の「鳴鳳記」と「表忠記」は、ともに嘉靖朝における嚴嵩親子の専權誤国と、この親子に対して死を賭して反対する正義派官僚達のことをテーマとしている点で共通する。

筆者は、かつて「金瓶梅」に描かれた役人世界とその時代<sup>(2)</sup>という論文で、「金瓶梅」に投影された時代を嘉靖時代ではなかったかとしたが、本考では、楊繼盛という実在の人物を通じて、「金瓶梅」の「続金瓶梅」との、あるいは「鳴鳳記」「表忠記」とのつながりに着目しつつ、「金瓶梅」に反映されている時代はやはり明の嘉靖時代ではなかったかと言うことを、改めて論じてみたい。

### 一、「続金瓶梅」及び戯曲「鳴鳳記」「表忠記」について

「金瓶梅」と「続金瓶梅」、それに「鳴鳳記」「表忠記」の両戯曲がどのような関係にあるのか、まず見てみたい。その前に、「続金瓶梅」「鳴鳳記」「表忠記」それぞれの内容を簡単に紹介した上で、それぞれの成立年代と作者とに関し今日まで判明していることについてまとめておこう。

#### イ、「続金瓶梅」について

まず、この梗概というのは、次のようなものである。

話は、「金瓶梅詞話」第百回の普静師推拔群冤の段をうけて始まる。まず西門慶は、都東京の金持沈通の子金哥に生れ変わり、李瓶児は、やはり東京の袁指揮の娘で常姐に生れ変わる。また潘金蓮は山東の黎指揮の娘の金桂に、春梅は東京の孔千戸の娘で梅玉という者にそれぞれ生れ変わる。

さて、この小説の冒頭は、金兵が大挙して山東を侵略し、天下は大いに乱れ、人は争つて南へ逃げることから話が始まる。呉月娘も、孝哥と下男の玳安・小玉夫妻を連れて、家を棄てて南をめざして逃げることにした。ところが、逃げる途中、月娘と小玉の二人は玳安と孝哥の二人を見失う。一方玳安と孝哥の二人は、月娘らとはぐれた後しばらく一緒に逃げていたが、やがて、この二人もはぐれてしまい、幼い孝哥は途中で出会った応伯爵の手を経て、普静和尚のもとにひきとられ、髪を剃って出家し了空と名乗る。他方、呉月娘も、金兵から逃げる途中、淮安の一小尼寺で剃髪して、慈静という尼になる。

さて、李瓶児の生れ変わりの袁常姐は、ある日、徽宗の寵愛を受けている名妓の李師々に見いだされた後、李師々の下で妓女となり名も銀瓶と変える。銀瓶は、洛陽の金持翟員外に水揚げされ一時その妾となるが、鄭千戸の息子で花子虚の生れ変わりの鄭玉卿と恋愛関係に陥り、二人は翟員外の目を盗んで駆け落ちする。ところが、この恋の逃避行の途中、薄情な鄭玉

卿の心変りにより、銀瓶は揚州の塩商苗青に売り渡されてしまふ。この苗青の正妻は嫉妬深く、たび重なる虐待に銀瓶は耐えられず、とうとう自縊して死ぬ。また、西門慶の生れ変わりの沈金哥も、金兵の侵入後、次第に没落して、最後は乞食となつて死ぬ。春梅の生れ変わりの梅玉は、富貴を慕つて金将の息子の金哈木の妾となるが、この金哈木の正妻というのが、実は孫雪娥の生れ変わりの粘太々という女で、やっぱり梅玉につらく当り、その虐待に耐えられず、梅玉も出家して梅心という尼になる。金蓮の生れ変わりの黎金桂は、前生にひきつづいて美人になったが、彼女の許婚いごつけというのが実は陳經濟の生れ変わりで、山西守備の息子の劉朝という男であった。彼はピッコの不具者で金桂は不満であったが、許婚いごつけというので渋々結婚する。しかし間もなく我慢ができなくて離婚し、結局、金桂も大覺寺で出家して蓮浄という尼になる。

さて、月娘と孝哥は、その後普静禪師の導きにより、南海普陀落山で再会し、後、月娘は仏に仕え八十九才で亡くなり、十数年後には、孝哥も坐化したまま成仏し、母子ともども正果を得たというもの。

さて、この「続金瓶梅」の作者は、名は丁耀亢、字は西生、号は野鶴・紫陽道人・木鷄道人といろいろある。山東は諸城の人で

ある。その生卒年代については、これまで諸説あったが、今では万曆二十七年（一五九九）に生れ、康熙八年（一六六九）に七十才で没したが定説と見てよいだろう<sup>(3)</sup>。

この小説が執筆された時代ないし刊行された時代については、諸説ある。

まず1)、一九八七年に発表された伊藤漱平氏による説で、恐らく丁耀元がかねてより交りのあつた浙江左布政使の張縉彦の財政援助をうけて、順治十三年（一六五六）に杭州で刊行したものであるとする説<sup>(4)</sup>。

2)、一九八八年に発表された黄霖氏による説で、「統金瓶梅」六十二回末には、作者丁耀元の前生と前々生に関する三度転世の小挿話を載せるが、その中に「丁野鶴、棄家修行、至六十三歳、向吳山頂上結一草庵、自称紫陽道人」と見えるを以つて、この小説は、作者が六十三歳、つまり順治十八年の時に書きあげたものだろうとする説<sup>(5)</sup>。

3)、一九九一年に発表された大塚秀高氏による説で、前記黄霖説をうけて、順治十八年にこの小説が刊行されたであろうとする。ただ執筆時代については、順治十二年から同十五年までの四年間の詩作の量が他の時期に比べて甚しくすくないので、恐らく丁耀元はこの時期に詩作以外のもの、つまりこの小説の執筆に精を出していたのではないかとする<sup>(6)</sup>。

4)、一九九一年、石玲氏が発表した説で、この小説の執筆時期は順治十七年、刊行は順治十八年、蘇州の陳孝寛が出版したとする説<sup>(7)</sup>。

伊藤・大塚両氏の論文は博引旁証で、筆者は、今これを上まわる材料を持ちあわせていないが、理性的に判断するならば、やはり黄説の如く、この小説は、順治十七年ないし同十八年に書きあげられたものと見るべきであろう<sup>(8)</sup>。勿論、この小説の構想は、後述の如く、それよりずっと前から作者の胸中にあつたであろう。大塚説のように、この順治十八年に刊行されたのかもしれない。その可能性は充分ある。

口、戯曲「鳴鳳記」について

まず、その梗概というのは、次のようなものである。

時は、明の嘉靖帝の御世（一五二二—一五六六）、折から国の北と南とは、所謂「北虜南倭」の侵寇があり、人民がこれに苦しんでいるというのに、都では、嘉靖帝が道教にうつつを抜かして、政治を一切省みなかった。その間隙を縫って、嚴嵩とその子嚴世蕃の専権誤国の賄賂政治が行われていた。この戯曲は、鄒応龍や林潤といった正義派の官僚を主人公とし、彼らが科擧に合格して政界入りしてから、何度かの試練を経て、遂に嚴嵩弾劾に成功するまでのことを描く。

鄒応龍は、科挙受験をめざす受験生である。杭州の報国寺に先輩の挙人の郭希顔がいると聞いて、彼の所を訪れ、その時やはり同じく科挙をめざして勉強中の林潤と出会い義兄弟となる。鄒と林の二人は受験を前にして、靈験あらたか神をまつる福建仙游県に詣でにゆき、そこでまた陝西の挙人の孫丕揚とも識り合う。そして三人は、その仙游の神廟で神から未来を暗示する口占十二句を授かる。やがて、鄒と林の二人は、めでたく科挙に合格する。そして、たまたまその時彼等の座主であった郭希顔とともに、夏言及び楊繼盛夫妻の墓に参詣し、その忠烈の靈を弔う。その後、嚴嵩は鄒林の二人を自分の門下に入れようと誘うが、二人がこれを断つた為に嚴嵩は怒り、鄒を山西道御史に、林を雲南の行人としてそれぞれ左遷させた。更にその後、礼部主事の董伝策・兵部郎中の張翀・工部給事中の呉時來の三人が連名して嚴父子を弾劾する。しかし、この時三人は、いずれも嘉靖帝の勘気を蒙り、辺遠の地に謫戍される。後に鄒は任務を果して、北辺より帰京するや、懲りずに嚴父子を弾劾し、たまたまこの時、刑科給事中をしていた孫丕揚も期を同じくして嚴父子を弾劾した。そこでさしもの嘉靖帝もようやく目が醒めて嚴父子の悪事に気が付き、とうとう命を下して、嚴家の全財産を没収し、嚴嵩は免官の上養老院に収容し、嚴世蕃は死刑に処することにする。そこで、鄒と林は、功により各々昇

進するというもの。

なおこの間に、内閣大学士の夏言が嚴嵩との政争において敗北し死刑に処せられる話や、楊繼盛が嚴嵩を弾劾して逆に罪を得、獄に下ったのち処刑されて死ぬ話、あるいは、倭寇の襲来の話等を挿入している。

この「鳴鳳記」の作者については、古来、1) 作者不明説(明・呂天成「曲品」)、2) 王世貞説(清・黃文暘「曲海總目」)、3) 王世貞の門人説(清・焦循「劇説」卷六、清・無名氏「曲海総目提要」卷五)と様々ある。このうち、作者王世貞ないし王世貞の門人説は、「金瓶梅」の作者に関する伝説に似ている。なお、3) 王世貞の門人説に近い説に、同じ太倉の人で唐儀鳳という人物がこれを作った説もある。それは、「民国太倉州志」卷二十七に見えるもので、

「唐儀鳳は、州鳳(王世貞をさす)里の人なり、才あるも遇に艱なり、『鳴鳳伝奇』を撰して、椒山公(楊繼盛をさす)等の大節を表す。書成るや、之を弇州(王世貞のこと)に質す。弇州曰く『子の填詞は、甚だ佳し、然れども書子より出すと謂わば則ち伝わらず、我より出すとせば乃ち伝わらん。吾れ美を掠わんと欲するに非ず。正に以て子の美を成さんとするのみ』と。儀鳳之を許す。弇州乃ち贈るに白米四十石を以てす。而し

て刊するに己の編する所と為せり。然れども、吾が州、皆な唐より出ざるを知るなり。」と。

この話は、大変生しく興味をそられる記事であるが、むしろその点、真偽のほどが疑われる。結局のところ現状では、「曲品」の言うように作者不明とすべきであろうが、ただ、この戯曲の中に嘉靖時の実在の人物が沢山登場しているのに、王世貞だけ登場しない点、却って、王世貞説ないしその門人説も捨てがたい所がある。

次に、この製作時代について考えてみよう。まず、張慧劍氏「明清江蘇文人年表」を見ると、「錢牧齋年譜」に依るとして、万曆十五年に常熟「鳴鳳記」伝奇が上演されているとあることから、この万曆十五年が、この戯曲の製作年代の下限である。ところが、張氏同年表を見ると、万曆二年の条に、前掲の「太倉州志」巻二十七を挙げ、唐儀鳳がこの戯曲を作つてこれを王世貞に売り渡したのがこの年のこととされている<sup>(9)</sup>。さらに、焦循の「劇説」巻六を見ると、「王弇州史料中、楊忠愍公伝略は伝奇と合わず、相伝う鳴鳳伝奇は、弇州門人の作にして、唯だ法場一折は是れ弇州自ら填詞すと。詞初めて成りし時、(弇州)優人に命じて之を演ぜしめ、県令を邀えて同観す。令色を変じて起つて謝し、亟かに去らんと欲す。弇州徐ろに邸報を出し之に示して曰く『高父子は、己に敗せり』と、乃ち宴を終る」と見え、青木正児

氏は、「支那近世戯曲史」の中で、この記事に依り、嚴父子が誅に伏したのは嘉靖四十四年のことだから、この戯曲もその頃に成立したものであらうと推測されている<sup>(10)</sup>。

以上をまとめると、「鳴鳳記」は、嚴父子が失脚してから間もなくの嘉靖末より隆慶・万曆初年に成立したものと推測され、作者については、古来、王世貞説あるいはその門人説があつたが、結局のところ不明ということになるであらう。

#### ハ・戯曲「表忠記」について

「表忠記」、正しくは、「楊忠愍蝮蛇胆表忠記」という。例によつて、まずその梗概を示すならば、以下の通りである。

容城の人楊繼盛は、兄夫妻に迫られて己むなく野に出て放牧をするが、志ははずれ科挙に合格後、国政の場で正義を貫く所にあつたので、いつも手から書物を離さなかつた。そこへ通りがかつたのが折から科挙受験の為に上京してきた王世貞であり、二人は話を交わすうちに意気投合して、義兄弟の契りを結ぶに至る。

丁度その頃、都の朝廷内では、俺答オイワラの手から河套の地を奪還するか否かで内閣大学士の夏言と嚴嵩とが激しく争つていた。だが、結局夏言がこの政争に敗れ、詔獄に下つたのち処刑されて死ぬ。

さて、科挙受験の為に一步遅れて都入りした楊繼盛は、都の報国寺に下宿している王世貞を訪ね旧交をあたためるとともに、その場に居た鄒應龍と林潤とも織り合い義兄弟となる。やがて王世貞とともに楊繼盛は、科挙に合格し、南京吏部驗封司の職を拝命し、まず南京に赴く。丁度その頃朝廷は、北のモンゴル族との間に屈辱的な馬市という貿易を行うことを決定したので、職が兵部車駕司員外に変わり都に戻るようになった楊繼盛は、国の行く末を憂えてこの馬市に反対する上奏をする。この上奏文を見た嘉靖帝は、一時心を動かすが、嚴嵩に言いくるめられ、結局、楊繼盛は、狄道県典史として辺遠の地に左遷させられる。楊が狄道県で善政を行っている間にも、都では嚴親子はますますのさばっていて、王世貞の父の王忬を陥れて殺すなどしていた。楊は、間もなく山東青州府諸城県知県や南京戸部主事をへて、兵部武選司員外としてまた北京に戻ってくる。嚴親子の専権にもう我慢のできなくなった楊繼盛は、とうとう嚴親子を弾劾する上奏文を出す。しかし、この上奏文中に二王の文字があり、これが嘉靖帝の勘気にさわり、繼盛は、今度こそ生きて再び帰れぬ詔獄に下ることになる。

楊繼盛のことを聞き知った王世貞は、獄中にいる楊に蚡蛇胆という靈薬や酒の差し入れをして彼を励ます。しかし、嚴嵩は楊繼盛の名前を倭寇防備で失敗した総督張経の部下の名前に紛

れ込まして、張経らとともに処刑を執行してしまう。

後に、監察御史の鄒應龍と兵科給事中の林潤とが連名で嚴親子を弾劾する上奏を行い、この時ようやくその上奏が認められて、嚴親子は出身地の江西まで引き回しの上、かの地にて処刑し、家財は一切没収すべしという聖旨が下る。おしまいに王世貞の上奏により楊繼盛の名誉回復が図られるというもの。この間に、大同総兵仇鸞の売国奴的行為や、嚴世蕃の色と金に塗まみれた墮落した生活、さらに嚴親子に逆らってその毒牙にかかり殺された錦衣衛経歴の沈鍊の話などが織り込まれている。

以上、さきの「鳴鳳記」が鄒應龍と林潤を中心に描くのに対して、この「表忠記」は、楊繼盛を中心に話を展開させている。

この戯曲の作者は丁耀亢で、同戯曲冒頭に附された順治十六年に書かれた敦棗（字芝仙）の序によれば、

時の順治皇帝は、「鳴鳳記」戯曲を忠臣を勧め佞臣を斥くるとして大変評価されていたが、ただ鄒應龍や林潤を中心にすすえている点が不満であった。それで、時の宰相の馮銓と戸部尚書の傅維麟の二人は、皇帝の意を体して、丁耀亢に、戯曲を夏言や楊繼盛を中心にすすえるものを書き換えてほしいと依頼した<sup>(1)</sup>。

つまり、丁耀亢がこれに筆を執ったいきさつは、始めは、皇帝の命をうけた勅撰の戯曲だったのである。しかし、この劇ができあがった後、馮と傅の二人にこれを見せると、二人は、第二十二齣の後疏中の文句の中に皇帝に対して差し障りの部分のあることを認めたので、耀亢にこの部分の書き直しを迫り、耀亢は、それで結局の所、この戯曲を皇帝に呈上しなかつたとも、この序の中で書かれている。

この戯曲が書かれたのは、この戯曲の第三十六齣に、金甲神が登場し「今順治十四年に当り、大清国の聖明天子、御筆もて親しく表忠御序を題し、天下に頒行したもう。上帝大いに喜び、此れより風調雨順い、国泰民安なり云々<sup>(12)</sup>」とあることから、さきの郭棻の序が書かれた順治十六年より二年前の順治十四年のことであつたことがわかる。

## 二、「金瓶梅」と「続金瓶梅」並びに戯曲「鳴鳳記」「表忠記」との関係

以上長々と、「続金瓶梅」と戯曲「鳴鳳記」「表忠記」の梗概と作者、さらにその成立時代を考察してきたのは、これら小説・戯曲と「金瓶梅」との四者の関係を明らかにし、ひいては、「金瓶梅」の作者が「金瓶梅」で真に描こうとした時代がいつだったのかを明らかにしようとする為に外ならない。

ではさつそく、「金瓶梅」とその続書たる「続金瓶梅」との関係について考えてみよう。実は、「金瓶梅」の続書は、「続金瓶梅」のみではない。冒頭に挙げた「万曆野獲編」に見える「玉嬌麗(李)<sup>(13)</sup>」もそうである。蘇興氏は、その論文「《玉嬌麗(李)》の猜想と推衍」の中で、「金瓶梅」第百回で小玉が永福寺に現われた亡霊達が語った所を聞いた内容と、冒頭で示した「野獲編」の記事とから、「玉嬌麗」の内容を大胆に予想している。それによれば、作品は徐州の貧民范家の子として生れ変わった武大は、社会変動により都東京に入り、不当な大財を得て次第に西門慶風の大官となり、淫乱な生活を中心として、当時の朝臣の権力争いや、官僚と市井の人間の結びつき具合を描いたものではなかつたかと推定している。因みに、「野獲編」にいう顔完大定とは、金の世宗・嘉靖(在位一一六一—一一八九)を指し、表面的には金の社会を描いているようにみせかけて、実際は、明の世宗・嘉靖帝の時代のことを描いた「借古喻今」の小説ではなかつたかともする。

もし、「野獲編」の言うように、この「玉嬌麗」の作者と「金瓶梅」の作者とが同一人物なら、「金瓶梅」も、「借古喻今」の小説として作られた可能性は充分にある。

では、この「玉嬌麗」と「続金瓶梅」の関係はどうなっているのだろうか。実は、沈徳符がこの「玉嬌麗」を所持していたとい



う丘志充は、山東諸城の人であり、その息子の丘石常は、同郷の人で「続金瓶梅」の作者である丁耀亢と大変仲が良く一生付き合っていたとして、かつて馬泰来氏がその論文「諸城丘家と金瓶梅」の中で、丘家に例の「玉嬌麗」なる小説が伝わっていて、丘石常を通じて丁耀亢がこれを見たということも考えられる。従って「玉嬌麗」が「続金瓶梅」の藍本であるかどうかさすこぶる検討に値するとされた。(14)

しかし、「玉嬌麗」と「続金瓶梅」は、ともに「金瓶梅」の続書であることだけは間違いないが、「続金瓶梅」は、「玉嬌麗」とは本来別の本で、この「玉嬌麗」から影響を受けたことがないとする説(15)もある。実際、現在する「続金瓶梅」を見るかぎり、武大が始め貧民の范家に生れた後、淫乱の金持になるというような筋立にはなっていない。しかし、例えば次表でもわかる通り、人名の点において、「続金瓶梅」は、「玉嬌麗」に基づいたとする「金瓶梅」第百回で幽霊達が語る所とおおむね一致する。

	「金瓶梅」百回	「続金瓶梅」
西門慶	東京の富家沈通の次子 沈鍼に生れ変わる。	東京の富家沈鍼の息子 金哥に生れ変わる。
花子虚	鄭千戸の息子に生れ変わる。	鄭千戸の息子鄭玉卿に 生れ変わる。

潘金蓮	東京の黎家の娘に生れ変わる。	東京の黎千戸の娘黎金桂に生れ変わる。
春梅	東京の孔家の娘に生れ変わる。	東京の孔千戸の娘孔梅玉に生れ変わる。
李瓶児	東京の袁指揮の娘に生れ変わる。	東京の袁指揮の娘袁常姐に生れ変わる。

従って、黄霖氏も指摘されるように(16)、「玉嬌麗」を所持していた丘志充の丘家と、丁耀亢の丁家とは山東諸城の名宦の家柄でかねてより付き合ひがあり、丘志充が都を去った万曆四十九年には、息子の石常は十四才、丁耀亢は二十四才にもなっていたから、丘石常と丁耀亢の二人が直接その「玉嬌麗」を見ることのできなかつたにしても、父の丘志充から荒筋ぐらひは聞いていたことも充分に考えられ、「続金瓶梅」の藍本が、「玉嬌麗」だとは言えないにしても、この二つの小説がまったく関係がないとも言えないとするのが妥当なのではあるまいか。

また、これは証拠はないが、「諸城県志」によれば、丁耀亢が、万曆四十八年、二十一才の頃、江南に行き、董其昌の門下に遊び、陳古白・趙凡夫・徐闇公らと文社を作ったと見えることから、董其昌が所持していた「金瓶梅」抄本をこの時に見た可能性もあると推定する説もある(17)。丁耀亢が、万曆四十八年のその時

期に、たとえ抄本や刊本で見なかったとしても、その後のいずれかの時期にかならず世に出まわっていた「金瓶梅」の刊本を一度は見たはずである。そしてその作風を学んだに相違ない。その作風とは何か。それは、「借古喻今」の作風だと言いたい。

丁耀亢は、康熙四年（一六六五）に「続金瓶梅」を作ったかどて捕えられ獄に下った。「続金瓶梅」が禁書になった表向きの理由は、それが「淫書」だったからという伝統的なものだったが、実際は、内に丁耀亢の強烈なる民族感情と反清の傾向があると清の当時の統治者が感じとったからだと考えられている<sup>(18)</sup>。作中、宋と金との戦争のことを描いていて、実際は、これに明清易代のことを重ねていることは充分に知られている事実である。つまり、宋を以て明を、金を以て清を実際には描いている。その証拠に、作中このことを暗示する語句がちりばめられている。例えば、六回・十九回に見える「厥衛」「錦衣衛」は、明代に置かれた役所名。二十八回・三十五回に見える「藍旗營」「旗下」は、清朝の八旗制度で金にはなかった。五十三回で金が揚州を占拠した後に見える「滿江紅」の一詞には「清平三百載<sup>(19)</sup> 典章文物掃地俱休」と見えるが、この「三百載」は、明らかに前後二百七十六年間続いた明王朝を指しており、僅かに百七十六年しか続かなかった北宋王朝を指していない。しかも、六十二回には「朱頂雪衣」の鶴を以て自ら喻え、自らを明人だと称し、十四回には、

大明万曆年間金陵の状元朱之蕃の故事を出して、清朝開国の頃に先朝のことを大胆不敵にも大明と書いていることなどが挙げられている。

そして、特に冒頭の一回と二回、更に五十三回には、金軍の残忍さと大量殺戮と暴行を生々しく描写して、実際には清の中国侵略の時のことを描いているともされる。

このような「借古喻今」の作風は、「金瓶梅」の作風を継承したものと想像される。

次に、「鳴鳳記」と「表忠記」との関係について見てみたい。まず、両戯曲ともテーマはまったく同じで、嘉靖朝における嚴嵩・嚴世蕃の専横と淫乱な生活ぶり、それをとり巻く奸臣達、かたやこの嚴親子の誤国の罪を暴き、彼等を失脚せしめんと弾劾の上奏を行う官僚の攻めぎあいを描くものである。小説と異なり、実際の史実や歴史上の人名を直書している点も共通する。ただ少し違うのは、「鳴鳳記」が鄒応龍と林潤を中心に描くのに対し、「表忠記」はこれをあくまでも楊繼盛を中心としたものになっていることである。すでに見た「表忠記」冒頭に附された郭棻の序からも明らかのように、時の順治帝の意をうけた高官が、丁耀亢に「鳴鳳記」を書き換えて楊繼盛を中心としたものにしようとしたのであり、従って、「鳴鳳記」は、「表忠記」の藍本と言えるであろう。

では、「金瓶梅」と「鳴鳳記」あるいは「続金瓶梅」と「表忠記」の関係はいかがであるうか。この点を考察する前に、まず明清初の俗文学には、小説と戯曲の両面で活躍した人が多く<sup>(20)</sup>、同一題材を小説にしあるいは戯曲にする。また、小説を戯曲化したり、逆に、戯曲を小説化したりすることが多かったことを指摘しておかなければならない。例えば、馮夢龍は、小説「警世通言」巻十八「老門生三世報恩」を戯曲化して「三報恩傳奇」を作ったことは、その序に「余向に老門生小説を作り、政に少くして矜るに足らず、而して老にして慢る可からず、目前の短算者のために一眼孔を開かんとす」とあることから明らかであり、また、李玉の「眉山秀」劇も、「今古奇観」巻十七の「蘇小妹三難新郎」の話に依っていることが判っている。かつて鄭振鐸も、この劇に跋文を書いて「李玉『眉山秀』劇……述蘇氏父子兄妹事。以『今古奇観』之『蘇小妹三難新郎』話本為依据。明清之際、伝奇作家、每喜取材于『話本』、此亦其一種」と指摘している。

まず、「金瓶梅」と「鳴鳳記」との関係。

「金瓶梅」の方は、北宋末のことを描きつつ明代のことを投影させているのに対し、「鳴鳳記」は、明瞭に嘉靖朝の政事を描き、内容的にも直接は関係しないが、関係するとすれば、次の二点ばかりを挙げることができる。まず第一は、ともに、伝統的に

王世貞ないしはその門人が作ったとする説のあることである。

「鳴鳳記」に王世貞作者説ないしその門人作者説のあることは、先述の如くだが、「金瓶梅」も王世貞ないしその門人が作ったという説は、明清兩代を通じて広く一般に信じられていた。しかし、一九三一年から三四年にかけての呉晗の発表した論文によって、一時徹底的にこの王世貞説ないしその門人説が否定されたかに見えた。ところが、その後よく呉晗論文を読み直してみると、同論文は、王世貞作者をめぐる伝説を否定したにすぎない。つまり、①王世貞父子と嚴世蕃父子とが仇同志になった原因は、伝説に言われるような「清明上河図」とは無関係なこと。②唐順之や嚴世蕃が、「金瓶梅」を通じて王世貞に毒殺されたという伝説は荒唐無稽の作りごとであったことの二点が証明されただけで、王世貞ないしその門人説そのものを否定するには、呉晗氏のあげている材料は不足していることなどが指摘されるようになってきた<sup>(21)</sup>。従って、王世貞ないしその門人による創作説は、まだ完全に否定されていないのである。しかし、「金瓶梅」の作者は誰かについては、未だ決着のついていない大問題であり、今ここでこれを論ずるのは、やや本論文の論旨とずれるので、これの追求は他日に譲るとして、今は「金瓶梅」も「鳴鳳記」も、これまでに同じく王世貞ないしその門人が作ったとする説が伝統的にあり、その点で、両作品は似ているとのみ指摘するにとどめたい。

「金瓶梅」と「鳴鳳記」の関連する第二の点としては、どちらも、ほぼ同じ頃の嘉靖末より万曆初年に執筆成立した作品ではなかったかということである。「鳴鳳記」の成立は、嚴父子が失脚して間もなくの嘉靖末より万曆初年にかけて成立したものであることは、先に述べた。ところで、筆者は、「金瓶梅」もほぼ同じ頃の嘉靖末より万曆初年に執筆されたものと考えている。このことについては、既に、登場人物の服装からや、日付けの干支などからこのような推定を發表したことがある<sup>(22)</sup>ので、ここでは再述しない。要するに、「金瓶梅」と「鳴鳳記」は、ほぼ同じ頃に執筆されていたのではないかと考えるのである。

「金瓶梅」と「鳴鳳記」との関係は、以上のように、ともに王世貞ないしその門人がこれを作ったという伝説があることと、ほぼ同じ頃に書かれたものと推定されることの二点が関連する点として挙げられる。

次に、「続金瓶梅」と「表忠記」との関係について考えてみよう。

この両作品における関係する点としては、次のようなことが考えられる。まず、どちらも作者は同じ丁耀亢であることが挙げられよう。またその執筆時代も、すでに見たように、「表忠記」は順治十四年に完成、「続金瓶梅」は順治十八年頃に完成だが、その構想はその数年前から建てられていたと考えられ、これまた大

体同じ頃にこれを執筆していたと言ってもよいことも関連点として挙げられよう。

ところで、丁耀亢は、何故「表忠記」を書いたのであろうか。直接的には、順治年間の大官であった馮銓と傅維鱗の二人から、この戯曲の執筆を依頼された為であったことはさきに触れた。しからば、馮と傅の二人が、「鳴鳳記」の改作は余人をおいて外になしとして、丁耀亢に白羽の矢をあてこれを依頼したのは、何故だったのだろうか。

実は、丁耀亢は楊繼盛に対し、殊の外親しみと尊敬の念を懐いていたと思われる。それと言うのも、楊繼盛は、短期間であったが一時期、丁耀亢の生れ故郷である山東諸城の知県を勤めているし、丁耀亢は、順治十一年から同十五年まで、つまりこの「表忠記」を執筆していた時、容城教諭の任にあつたが、この容城こそ楊繼盛の故郷だったのである。それ故にこそ、丁耀亢は「表忠記」第十八齣末に「亢は、諸（城）に産して、（楊）先生に私淑し、久しくして官を容（城）に得たり、（楊）先生の為めに其の生面を絵くは、豈に偶然ならずや」と評をつけている。

内容的には、「続金瓶梅」が北宋末から金にかけての事を描きつつも、実際は明清の際の事を作中に投影させているのに対し、「表忠記」の方は、明確に明の嘉靖朝における嚴嵩の専權とそれを批判する楊繼盛のことをテーマとしており、直接には何の

関係もない。しかし、「続金瓶梅」では至る個所において、北宋滅亡の原因―それは同時に明滅亡の原因でもあるが―というものの考察に及び、凡そその原因として、①徽宗皇帝ら凡庸な皇帝による贅沢、②蔡京ら佞臣寵臣による誤国、③張邦昌・劉豫・蔣竹山・苗青ら漢奸による売国行為。以上の三点ぐらいを作中において繰り返し考察しこれを述べている。一方、「表忠記」は、歴史上の人物や事件に基づく戯曲で、いわば上記のうちの②佞臣寵臣による誤国というものを明らかにしようとしたものと言える。かく考えるならば、丁耀亢における「続金瓶梅」と「表忠記」との関係は、補充と照応の関係にあるとすることもできるのではないか。「続金瓶梅」と「表忠記」との関係は以上の通りである。

小説の「金瓶梅」と「続金瓶梅」、それに戯曲の「鳴鳳記」と「表忠記」の以上四作品の関係について、これでいささか明らかにしえたと思う。

ところで、さきに「金瓶梅」は「借古喻今」の小説として作られた可能性があると言ったが、では、その「今」とはいつのことなのであるか。筆者は、その「今」というのが、戯曲「鳴鳳記」や「表忠記」に描かれた明・嘉靖朝のことと考えており、今これを、「金瓶梅」の作品中より検証してみたいが、その前に、この嘉靖朝というのはどんな時代であったかを概観しておこう。

### 三、嘉靖という時代について

明の十二代皇帝世宗嘉靖帝の治世（一五二二～一五六六）に著しい特徴を三点挙げるとするならば、①所謂「北虜南倭」の禍のあったこと。②道教に心酔し政治をかえりみない嘉靖帝にかわって、政治の実権を大学士嚴嵩が握り、前代未聞の賄賂政治が繰り返されたこと。③楊繼盛や海瑞といった、嘉靖帝に対して死を賭して諫め、また嚴嵩を弾劾しようとする勇氣ある官僚が続出したこと。この三点が挙げられよう。しかも、これらの特徴に附随して、この時期実に魅力的な人物が多数輩出した。まず倭寇鎮圧には、胡宗憲・俞大猷・戚繼光らの名前を挙げることができる。この倭寇はなんとか鎮圧したのに対し、北虜たるモンゴル族の侵入と、「馬市」と称する通商の要求には、嘉靖年間を通じて、終始明朝廷は悩み通しであった。まず、大学士夏言とともにモンゴル族の手よりオルドス（河套）の地を奪還せねばと主張し、嘉靖帝と嚴嵩とからいたずらに辺釁を開いたとして処刑された曾銑、嘉靖二十九年の所謂「庚戌の変」で、その北夷に対する及び腰を批判されて処刑された丁汝夔らは、いわば悲劇の俳優であるのに対し、終始自らの作戦上の失敗をひたすら糊塗することにあげられた仇鸞や趙文華、また嘉靖帝の道教狂いに乗じて、我が身の出世を図った邵元節や陶仲文ら道士、嘉靖帝からの寵幸を得て太保という異例の出世を遂げた陸炳、あるいは、嚴嵩の義子となって天下に

様々な流毒を流しつづけた趙文華や鄢懋卿らとなると、これらはみな嘉靖朝において悪役を演じた者達である。かたや、嚴嵩やその取り巻きの一党に対して身を賭して批判した者に、周天佐・沈鍊・楊繼盛・徐学詩・王宗茂・呉時来・張紳・董伝策・鄒応龍・林潤らと夥しい人物名を挙げる事ができ、またその道教狂いと政治をかえりみないことについて嘉靖帝を批判した者に、楊最・楊爵・海瑞等がいる。まこと、嘉靖年間は剛直で正義を貫き通した官僚の沢山輩出した時期であつた。彼らの多くは、「明史」巻二百九と巻二百十にその伝が見えるが、この両巻の末につけられた賛がまことにこの時期の人材の特徴を言いあてていていると思われるので、次に引用したい。

まず、巻二百十末の賛文は、

世宗は庸儒の主に非ざるなり、(嚴)嵩相たること二十余年、營を食ること盈貫す。言う者、踵しんに至り、斥逐罪死され、之に甘んずること飴の若し、而るに君心の一悟を得る能はず。

また、巻二百九の賛には、次のように見える。

語に之有り。「君仁なれば則ち臣直なり」と。世宗の代にあたり、何ぞ直臣の多きや。重き者は顯戮けん、次は乃ち長繫けい、最も幸なる者すら貶斥へんを得、未だ苟全なる者有らざるなり。然れども、主威愈々震い、而るに士気衰へず、批鱗碎首さいさるる者踵くひすを接して遏やむ可からず。其の難を蒙るの時を覩るも、之に処するに泰然た

り、頑儒をして興起する所を知らしむるに足る。斯れ百余年培養の效也

さて、以上のように、この時期には、実に魅力的な人材が多く輩出し、しかも後世から見ると、これらの人々の多くが、割と容易に善玉と悪玉とにふり分けることができるのも、またこの時期の特徴ではなかつたかと考えられるのである。

#### 四、「金瓶梅」に投影された時代

さて、では次に、「金瓶梅」に投影された時代とは一体いつのことか、それはどの部分から窺えるのだろうか。それには、筆者はなによりも、「金瓶梅」の作者が作中に宋代や明代の實在の人物名を挙げている部分を見るべきであると考え。そして、作中に宋代あるいは明代の實在の人物名が出てきて、かつそこから、この作者が表向きは北宋末のことを描いているようにみせて、実際に描きたかったのはどの時代なのかを窺うことができる重要な個所としては、なによりも以下の二個所を挙げるべきであると考える。

(一) 第十七回兵科給事中宇文虚中の上書の個所

(二) 第六十五回で都から花石綱を受け取りにくる勅使六黄太尉を迎える山東の役人達を描く個所

まず、(一)の十七回の宇文虚中の上奏文について。このことにつ

いては、かつて筆者は、この上奏文には嘉靖二十九年の所謂「庚戌の変」の投影が見られるとした<sup>(23)</sup>が、その後この説を修正して、次のように論じた。再度拙論を引用することをお許し願いたい。

「十七回の宇文虚中の弾劾と楊戩の失脚をどう見るか。かつて筆者は、これは嘉靖二十九年の庚戌の変の投影ではないかと論じたことがあるが、冷静によく考えてみると、このように一つの事件に結びつけることにはやや無理があると考えられるので、ここでは、もっと広く考えてみることにしたい。つまりこれには、河套の地を回復すべきか否かで、結局嘉靖帝の同意を得られず失脚し殺されるに至った嘉靖二十七年の曾銑・夏言の事件、または庚戌の変の責任から殺されるに至った同二十九年の丁汝璉・楊守謙の事件、あるいは蒙古軍が灤河を越えて深く中国の地に侵入した責任をとって殺されることになった同三十八年の王忬の事件等、北方の遊牧民との間に惹起された一連の事件の漠たる投影がこの宇文虚中の弾劾ではなかったかと筆者は考える。<sup>(24)</sup>」

この結論は、今でもあまり変える必要はないものと筆者は考えている。ただ、ここで新たに述べたいのは、宇文虚中の上奏文と嘉靖三十二年に出された楊繼盛による嚴高弾劾文との関係である。

その前に、十七回に見える宇文虚中による蔡京ら三奸臣に対する

る弾劾文を挙げておこう。それは、次のようなものである。

兵科給事中宇文虚中等一本、懇乞宸断、亟誅誤国權奸、以振本兵、以消虜患事。①臣聞夷狄之禍、自古有之。周之玁狁、漢之匈奴、唐之突厥、迨及五代而契丹浸強、又我皇宋建国、大遼縱橫中國者已非一日。②然未聞内無夷狄、而外萌夷狄之患者。諺云、霜降而堂鐘鳴、雨下而柱礎潤。以類感類、必然之理。③譬猶病夫至此、腹心之疾已久、元氣内消、風邪外入、四肢百骸、無非受病、雖盧扁莫之能救、焉能久乎。④今天下之勢、正猶病夫尪羸之極矣。⑤君、猶元首也。輔臣、猶腹心也。百官、猶四肢也。陛下端拱於九重之上、百官庶政各尽職于下、⑥元氣内充、榮衛外扞、則虜患何由而至哉。

今招夷虜之患者、莫如崇政殿大学士蔡京者、⑦本以儉邪奸險之資、濟以寡廉鮮恥之行、讒諂展面諛、上不能輔君当道、贊元理化、下不能宣德布政、保愛元元。徒以利禄自資、希寵固位、樹党懷奸、蒙蔽欺君、中傷善類、忠士為之解体、四海為之寒心。聯翩朱紫、萃聚一門。⑧邇者河湟失議、主議伐遼、内割三郡。⑨郭藎師之叛、失陷卒致、金虜背盟、憑陵中夏。此皆誤国之大家、皆由京之下職也。⑩王黼貪庸無賴、行比俳優。蒙京汲引、薦居政府、未幾謬掌本兵、惟事慕位苟安、終無一籌可展。⑪邇者張達殘於太原、為之張皇失散。今虜之犯内地、則又挈妻子南下、為自全之

計。其誤国之罪、可勝誅戮。楊戩本以紈袴膏粱、叨承祖蔭、憑藉寵靈、典司兵柄、濫膺閭外。大姦似忠、怯懦無比。此三臣者、皆朋党固結、内外萌蔽、為陛下腹心之蠱者也。數年以來、招災致異、喪本傷元、役重賦煩、生民離散。盜賊猖獗、夷虜犯順。天下之膏腴已尽、國家之紀綱廢弛。雖擢髮不足以數京等之罪也。臣等待罪該科、備員諫職、徒以目擊奸臣誤国而不為皇上陳之、則上辜君父之恩、下負平生所学。伏乞宸斷、將京等一干党惡人犯、或下廷尉、以示薄罰、或置極典、以彰顯戮、或照例枷号、或投之荒裔、以禦魑魅。庶天意可回、人心暢快。国法已正、虜患自消。天下幸甚、臣民幸甚。

この上奏文は、「新刻繡像批評金瓶梅」の眉評にも、「絶妙の議論なり、当に『名臣奏疏』中に選人すべし」とあるように、なかなかの出来ばえであり、筆者は、少なくとも上奏文を一度ぐらい書いたことのある人でないとこれだけは書けないのではないかと考える。それはともかくとして、この奏文は、すでに指摘したように、いろんな素材を利用して作られている。例えば、②の部分は、「大宋宣和遺事」前集末尾につけられた「宣和講篇」中の語句をほぼそっくり引用したものである。

更に、①の「夷狄の禍は古よりこれあり」という文句は、北辺防備に関する上奏文における常套文句だったようで、例えば「明

經世文編」（陳子龍等選輯）をひらくと、至る所にこの文句を見ることができると。例えば、卷二百六十五胡宗憲の「題為獻愚忠以稗国計事疏」には「臣聞夷狄之為中国患、自古有之」と見え、卷二百八十三王忬の「條陳末議以賛修攘疏」には「臣聞夷狄之患、自古有之」とあり、卷三百十六王崇古の「再奉明旨條議北虜封貢疏」には「夫夷狄之為中国患、從古以來」、また卷三百二十一方逢時の「審時宜酌群議陳要実疏」には「臣聞自古為中国之患者、莫甚於夷狄」と枚挙にいとまがない。また、③と④の部分は、嘉靖二十年に出された楊爵の「慰人心以隆治道疏」の「方今天下大勢、如人衰病之極、内而腹心、外而百骸、莫不受病、即欲拯之、無措手之地」に似ている。また、このように現下の趨勢を人体の不調にたとえて述べるのも、上奏文において一般的であったと思われ、例えば、先に引いた王忬の「條陳末議以賛修攘疏」では、「竊觀京師猶人腹心也、通州涿州昌平密雲、猶人四肢也。腹心以運四肢、四肢以衛腹心。」また、張居正が嘉靖二十八年に上疏した「論時政疏」には、「臣聞天下之勢、譬如一身。人之所恃以生者、血氣而已。血氣流通而不息、則薰蒸灌溉乎百肢、耳目聰明、手足便利而無害。一或壅闕、則血氣不能升降、而腫痺之患生矣。臣竊惟今之事勢、血氣壅闕之病一、而腫痺痿痺之病五、失今不治、後雖療之、恐不易為力矣。」（「張居正集」卷十五）と見える。



さて、②と⑥の部分の主旨は、国内に奸臣がのさばって悪い政治をしておれば、いくら北夷を攘おうとしてもだめだとするものだが、これは、既に指摘した通り、嘉靖二十九年に出された徐学詩による次の嚴嵩弾劾文にその主旨は大変似ている。

大奸柄国、乱之本也。乱本不除、能攘外患哉。外攘之備、在于内治。内治之要、在于端本。今大学士嵩、輔政十載、奸貪日甚、内結勲貴、外比群臣。

ところが、この徐学詩の弾劾文に非常に似ているのが、嘉靖三十二年に出された楊繼盛による「請誅賊臣疏」という嚴嵩弾劾文である。同弾劾文は相当に長文であるので、全文を引用することは控えることとし、この宇文虚中の上奏文の②と⑥の部分の主旨に似ていると思われる部分のみを挙げると、次の通りである<sup>(25)</sup>。

方今在外之賊、惟辺境為急、在内之賊、惟嚴嵩為最。賊寇者、辺境之盜、瘡疥之疾也。賊嵩者、門庭之寇、心腹之害也。賊有内攻、宜有先後、未有内賊不去而可以除外賊者。故臣請誅賊嵩、当在剿絶賊寇之先。……除外賊者、臣等之責、而去内賊者、則皇上之事。

冒頭にも挙げたように、「金瓶梅」における蔡京のモデルは、明・嘉靖朝における嚴嵩であると「万曆野獲編」以来目されてきた。楊繼盛は、同弾劾文の中で、嚴嵩の大罪十を数えあげている。今その十大罪を繁をいとわずに挙げるならば、以下の通りで

ある。

1) 明の太祖が丞相を廃止して、臣下よりの建言は直接皇帝にすべしとされたが、今の嚴嵩は、実質丞相の権力を握ってしまつて、祖法を壊している。

2) 嚴嵩は、皇帝の決裁の言葉を予め用意するいわゆる「票擬」に与ることによって、皇帝の大権を盗んでいる。

3) 嚴嵩は、「嘉靖疏議」なる書を刊行して、皇帝の聖論のうち善い施策はすべて自分が考えだしたもののように世に広めている。

4) 「票擬」の内容も、往々嚴嵩の一族郎党に漏れている。

5) 辺境の守りに対する論功功賞の基準がはつきりせず、往々、嚴嵩の一族郎党のみ功賞に与っている。

6) 仇鸞は嚴親子に賄賂を贈つて大将になったことは周知の事実。嚴親子が背徳の奸臣をかくまで登用出世させた罪は重い。

7) 嘉靖二十九年のいわゆる「庚戌の変」の時、兵部尚書丁汝璉を唆して、軍機を誤まらせ、結果、都に逼つた北夷の狼籍を黙過せしめた。

8) 京官や外官の成績を考察して黜陟オウチキョウする時、自分にへつらう者は昇進させ、自分に批判的な者はしりどけ、天下の善類をいためつけた。

9) 賄賂政治を行つて、天下の人心を失ってしまった。

10) 利ばかりを重んずる賄賂政治のおかげで、淳朴な風俗が悪化した。

今長々と嚴嵩の十大罪を挙げたが、これらは、宇文虚中の上奏文の⑦の部分の主旨に大体の点において一致している。今、大体の点において一致すると書いたが、これは、「金瓶梅」の作者はなかなかの曲者で、この部分に楊繼盛の上奏文をおわせつつも、読者には容易には悟られないようにしたこの作者一流の目くらまし法を使った為であると筆者は考える。

さきに、この「金瓶梅」を「借古喻今」の作品だとしたが、概して、この作者はこの「今」を示す場合、極めて慎重であり、さまざまな手を使ってすぐには判らぬようにしている。その手法の二、三を示すならば、

(1) 宋の事件と明の事件ないし宋人と明人を混せて一つにする。例えば、宇文虚中上奏文中の⑧の「河湟云々」の個所は、明らかに、明の河套奪還の計画を重ねて言っている。北宋時代、宋は北の遼との間には燕雲十六州の問題を、西北の国境では、西夏との間に青海地方の領有をめぐる争いがあったが、時の皇帝神宗は、熙寧三年(一〇七〇)に王韶の平戎三策の建言を納れて、青海地方の河湟の土地の奪還を彼に命じて、結果的には、西夏のみならず、周辺の遼や吐蕃との間にも緊張をもたらすことになり、結局この計画は失敗し、鄯州・湟州の地を建中靖国元年

(一一〇一)に吐蕃に手渡している。一方、河套の問題とは、「靖難の役」以来モンゴル族の掌中にあり、中国侵入の拠点となっている河套の地の套還は、明朝延積年の課題であったが、嘉靖二十七年にこれを主張する大学士の夏言と陝西三辺待郎の曾銑の二人は、遂に嘉靖帝の賛意を得られないうで、捕えられ処刑されている。「河湟には議を失つて」とは、河湟の地奪還ということがすでに朝廷の君臣の関心から離れてしまった宣和七年あたりのことを言っていると同時に、やはり、河套問題が廷臣らの口の葉にのぼらなくなつた嘉靖末年のことを重ねているのである。また「遼を伐たんことを主議し」とは、金と密約を結んで遼を挾撃しようとした宣和四年のことをさしているであろう。更に「内より三郡を割く」とは、太原・中山・河間の三鎮を金に割譲した靖康元年(一一二六)のことを指すものと思われる<sup>(26)</sup>。そのように考えれば、次の⑨の個所の、郭葉師が宋を裏切つて、金が宋への侵攻を開始したのが宣和七年(一一二五)十二月であることも、時期的にあう。また、⑩の「張達は云々」の個所は、次に「太原にやぶれて」とあることから、これは明らかに、宣和七年十二月の金軍の突然の侵攻に驚き、守備していた太原をすてて都に逃げ帰つた童貫のことを言っている。一方、上奏文に言う張達とは、嘉靖時代においてその勇名赫々たる人物で、嘉靖二十九年の所謂「庚戌の変」の時、大同を守つていた總兵官であつた彼

が、オイラートのひきいるモンゴル軍との戦いで名譽の戦死を遂げ、死後、朝廷から左都督の位を追贈された人物である。

(2) 目くらし法はその二は、歴史上の真実とデタラメとをやはり混ぜて一つにする手法である。例えば⑩の「王黼は官職を貪る無頼にして云々」のうち、「行俳優のごとし」の部分は、まことに歴史上の真実で、彼は蔡京の息子の蔡攸とともに宮中で演劇の催しがあると、共に顔に白粉を塗り、紅で隅取りをつけ、俳優の中にまじって道化役を勤めて、宮中の人々から喝采を博した人物であったことは、「宋史」卷四百七十二蔡攸伝<sup>(27)</sup>によっても知られる。しかし、彼が兵部尚書になったことは一度もなく、この部分はまったくのデタラメである。

以上、宇文虚中の上奏文と、楊繼盛の嚴嵩弾劾文との関係について考えてみた。さて、ここで味わうに足ると思われることに、「金瓶梅」では、この宇文虚中の役職名を兵科給事中としていることである。この職名自体すでに宋代のものでなく明代のものであるということは今はさておくとして、かの楊繼盛が嚴嵩を弾劾した時の官職名はと言うと、兵部員外郎だったのである。給事中と員外郎とは異なるが、同じ兵部というのは、気になる所である。また更に指摘しておきたいことは、王世貞がその文中に楊繼盛の嚴嵩弾劾文をそっくり引用して「楊繼盛行状」文を書いたのが、隆慶二年（一五六八）十二月<sup>(28)</sup>であり、これは、筆者が「金

瓶梅」や「鳴鳳記」が執筆されたと推定する時期とほぼ一致していることである。

次に(二)の六十五回に見える山東八府の役人達の登場とその意味について考えてみよう。このことについては、筆者はかつて「金瓶梅に於ける諷刺と洒落について」という一文<sup>(29)</sup>において専ら論じたので、細かい考証などはすべて同文を参照願うこととし、ここでは結論だけを指摘することにしよう。その前に、この六十五回の状況を簡単に説明することを兼ねて、拙稿の一部を次に再び引用してみる。

「北宋末のこと。時の徽宗帝が都の宮城の東北に鬼門を塞ぐべく良嶽<sup>ゾ</sup>という築山の造営を計画し、朱勳に命じて江南から運河を通じて珍木奇石のいわゆる花石綱を都に運ばせようとした。その第一便の船が淮上まで到着するや、都から勅使の六黄太尉なる者がこれを受け取りに山東にまでやって来る。この時、この花石綱輸送の責任者であった宋喬年は、友人の黄葆光を通じて、西門慶にこの勅使の接待を依頼する。ところがこの時西門慶は、丁度第六夫人の李瓶児に病死されたばかりでその葬式もひかえている時ではあったが、勅使の接待というのは極めて名譽なことなので、結局これを引き受ける。勅使の一行が清河県に入るや、山東八府の大小の役人達が勢ぞろいしてこれを出迎える。

まず、山東巡撫都御使の侯蒙と巡按監察御史の宋喬年、続いて

山東左布政の龔其、左参政の何其高、右布政の陳四箴、右参政の李侃廷、左參議の馮廷鵠、右參議の汪伯彥、廉使の趙訥、採訪使の韓文光、堤學副使の陳正彙、兵備副使の雷啓元、さらに続いて東昌府の徐崧、東平府の胡師文、兗州府の凌雲翼、徐州府の韓邦奇、濟南府の張叔夜、青州府の王士奇、登州府の黃甲、萊州府の葉遷といった人々が、これを出迎えている。」

このうちの少なくとも、侯蒙・宋喬年・汪伯彥・陳正彙・胡師文・張叔夜の六人は、宋代に実在した人物名であるのに対して、少なくとも、趙訥・凌雲翼・韓邦奇・黃甲の四人は、明代に実在した人物名であった。

それで、結論としては、①宋人と明人とを混在して登場させていること。②歴史上における肯定的人物と否定的人物とを混在させて登場させていること。③時には、歴史上の実像とはその立場や行為があべこべな人物を描いていること。④これら歴史上実在した人物の描写は、いずれも寸描にとどめ精しくは描かないこと、とまず以上の四点を導き出し、次に、恐らく作者は、読者に少なくとも次の二つの層を予想していたのだろうと結論づけた。つまり、作中に歴史上の実在人物が書き込まれ、それが往々歴史上とはまったく逆に描かれていることに気がつく作者と同程度の教養のある読者層と、そんなことには全然気がつかない読者層の両種の層である。さて、この論文で導き出した四つの結論もま

た、これまで説明してきた宇文虚中の上奏文において見られたものと同様、作者による目くらませ法だったと言える。

ところで、やはり気になるのが、ここで登場する凌雲翼であり、さらに、彼及び四十八回の狄斯彬、四十九回の曹禾の三人が、みな同年の嘉靖二十六年の進士であることである。また、この「金瓶梅」に何故か絶えて出てこない王世貞や楊繼盛も、やはり同年の進士であることも気になる点である。

何故作者は、作中に嘉靖二十六年の進士の名前を書き入れたのか、その真の意図は、今もってわからない。しかし、彼らの名前から少なくとも判ることは、「金瓶梅」に描かれているのが北宋末としながらも、実際は、明代の時事を描いており、しかも明代は明代でも、それは嘉靖時代ではなかったかということである。

「金瓶梅」という作品の中で、時事にふれた部分はすくなく、従って、なかなかその時事に対する作者の意図はわかりづらいのであるが、筆者は、この「金瓶梅」の作者は、楊繼盛や楊繼盛の事件に対して何か特別の感情をいだいていた人間ではなかったかと考える。ついでながら、この六十五回に徐州府知事として登場する韓邦奇は、一時、楊繼盛の師であり、楊に天文・地理・音楽・兵法などを教えたことがある人物である。判明しているのは、これぐらいで、一体何故作者が韓邦奇なる人名を出しているのか、一切判らない。諸賢の教示伏して願うものである。

## まとめ

李開先の「林冲宝剑記」と「金瓶梅」の類似点については、ト鍵氏らの詳細な考証があり<sup>(30)</sup>、そのあまりに類似点の多さに、論の赴くところ、「金瓶梅」の作者も李開先ではなかったかとされるが、筆者は、「金瓶梅」の作者は、確かに「宝剑記」の愛読者であったと言えるものの、作者とまでは言えないのではないかと考えている。この点については、いずれ稿を改めて論じたい。

ところで、戯曲の「宝剑記」「鳴鳳記」「表忠記」の三作品は、すべて中央の大官による専権誤国がテーマである点で共通する。中でも、「鳴鳳記」と「表忠記」は、直接嘉靖朝の大官嚴嵩の横暴とそれに身を賭して反対する官僚達の戦いを活写する歴史劇である。「鳴鳳記」も「金瓶梅」も、久しく王世貞ないしその門人による作とされ、また「表忠記」は、「続金瓶梅」と同じく丁耀亢による作である。

本小考は、小説と戯曲、また原作と続作との関係から、「金瓶梅」に実際に投影された時代を探り、それは明の嘉靖年間だろうと結論する。今、未解決の問題のあまりにも多く、かつ立論とその展開またその論証において極めて粗雑であることは十分に承知の上だが、あえてここに一文を草したのは、所謂「抛磚引玉」の意から出たものに他ならない。諸賢の教示を持つものである。

## 注

(1) この人物については、不明。しかし、蘇興「玉嬌麗(李)」の猜想と推衍」(『社会科学戦線』一九八七・一)によれば、この人物は、完顔大定と言うからに、明らかに金の第五代王・世宗(在位一一六一—一一八九)完顔雍のことだ。しかし、この帝は小堯舜とも称せられ、家臣にも賢臣が多く、彼の治世には何の権力争いもなかった。これは金を描いているとみせて、実は明の世宗(つまり嘉靖時代)を書いているのであろう。嚴嵩と夏言の争いを描き、嘉靖二十年の庶常の名を直書するに至っているのは、「借古喻今」であることは明らかだとする。

(2) 拙稿「『金瓶梅』に描かれた役人世界とその時代」(活水日文第二十二号、平成三年三月)

(3) 張慧劍「明清江蘇文人年表」(上海古籍出版社刊、一九八六年)による。また、大塚秀高氏「丁耀亢をめぐる小説と戯曲―明末清初における文学の役割について―」(埼玉大学紀要・教養学部 第二十七巻、一九九一年)にも、同じ説を力説しておられる。尚、大塚同論文は、北京図書館所蔵の「丁野鶴集」にもとずいてなされた丁耀亢の文業とその生涯についての精しい御論考で、今回教えられる所は少なくなかった。

(4) 伊藤漱平氏「李漁の戯曲小説の成立とその刊刻―杭州時代に

おける張縉彦・杜濬・丁耀亢らとの交遊を軸として見た―」

(「二松」第一集、一九八七年三月)

(5) 「金瓶梅続書三種」(齊魯書社、一九八八年八月刊)の黄霖氏による前言に見える。

(6) 大塚氏前掲論文、注(3) 参照。

(7) 石玲「《続金瓶梅》的作期及其他」(「金瓶梅芸術世界」吉林大学出版社一九九一年所収)

(8) 恐らく前記伊藤論文は、黄氏による前掲論文を見た後だと結論が変わっていたのではないかと筆者は推測する。同氏は前掲論文の中で、張縉彦こそ李漁や丁耀亢の著作出版に援助を与えたパトロンではなかったかとされるが、彼が真に丁耀亢の著作物出版のパトロンであったか否かという点は、いささか証拠材料が不足していると筆者は考える。例えば、同論文の中で、「出資者をその交遊圈内に求めるとすれば、……張縉彦を措いてほかに考えられまい」(頁187)として、王鐸・劉正宗・龔鼎孳などはいずれもパトロンたりえなかつたとされるが、では、順治十八年より康熙五年にかけて工部尚書にまでなった傅維麟はどうなのだろうか。因みにこの傅は、「明書」全百七十一巻の撰者として名高いのみならず、順治十四年に丁耀亢に「表忠記」の執筆を依頼しているのである。証拠は一切ないが、この傅だって、丁氏へのパトロンの候補たり得たのではあるまいか。また、伊藤氏同論文で、

「続金瓶梅」の執筆は、「丁氏が謂わば豹変して『表忠記』の執筆にかかる順治十四年以前と見た方がよからう」(頁184)とあるが、この推定の論拠もその明示がなく、根拠薄弱と言わねばならない。一方、黄霖氏発見による「続金瓶梅」六十二回のかの挿話の部分は、一度刊行された後、重刊された時に付加されたことも可能性としてはないではないが、「続金瓶梅」に関して考えるならば、今傅惜華所蔵原本を見る時、このような贅沢な本が順治十三年から同十八年にかけての極めて短い間に重刊されたとは甚だ考えにくい。従って、この小説の刊行年は、順治十八年以降と考えるのが妥当ではあるまいか。

(9) 張氏が依つたのは、「民国太倉州志」とのことだが、筆者の手元にこの書がなく、同書の同個所については、筆者には、趙景深・張増元編「方志著録元明清曲家伝略」(一九八七、中華書局刊)頁62を見る便しかもちあわせていないが、この書によるかぎり、この記事が万曆二年のことだとはどこにも書いていない。よって、張氏はいかなる材料により万曆二年と判断したものか、現在のところ不明である。

(10) 青木正児「支那近世戯曲史」(「青木正児全集」第三巻、昭和四十七年春秋社刊)頁165。

(11) 郭棻の序のうちこの部分の原文は、以下の通り。「曩如鳴鳳諸編、亦足勸忠斥佞。独是以鄒林為主腦、以楊夏為鋪張、微失本

旨。今上幾務之暇、覽觀興歎、思以正之。嗣以辞曲本朝所尚、慮有旁啓、未渙輪音。相国馮公、司農傅公、相顧而語曰「此非丁野鶴不能也。」于是礼属殷重。」

(12) この部分の原文を挙げると、以下の通り。「今当順治十四年、大清国聖明天子御筆親題表忠御序。頒行天下。上帝大喜、從此風調雨順、国泰民安云々。」

(13) 蘇興氏前掲論文(注1) 参照)によれば、「玉嬌李」と「玉嬌麗」は同一書で、たぶん、「玉嬌李」が誤りで、「玉嬌麗」が正しい書名だったのであろうとされる。その理由として、「金瓶梅」も、潘金蓮・李瓶児・春梅の三女性の名前の一字をとって作られた書名であるから、「玉嬌麗」も恐らく三女性の名前から作られたものだろう。もしそうならば、麗は名前に用いられるが、李となると姓にしか用いれない。よって、麗の方が正しいと考えられるとする。

(14) 馬泰来「諸城丘家と《金瓶梅》」(「中華文史論叢」三輯、一九八四年所収)

(15) 王汝梅著「金瓶梅探索」(一九九〇年、吉林大学出版社刊)第六講《金瓶梅》一書の前後、一、『玉嬌麗』(即「后金瓶梅」)之謎、頁136、141参照のこと。

(16) 黄霖氏前掲論文、注(5) 参照。

(17) 大塚秀高氏前掲論文(注(3) 参照)では、抄本ではなく、恐

らくそのとおりに刊行されたばかりの「金瓶梅詞話」を手にとる機会もあったことであろうと推測されている。

(18) これは、黄霖氏前掲論文、(注(5) 参照)の外に、周鈞韜氏「《統金瓶梅》の思想と芸術」(「金瓶梅研究」第三輯所収、一九九二年)にも同様の指摘がある。

(19) この「三百載」は、陸合・星月校点「金瓶梅続書三種」(齐鲁書社、一九八八年刊、これを校点本と称する)によった。傅惜華所蔵本(「古本小説集成」第一輯所収)を見ると、この箇所は、「三百載」となっているが、前後の文脈からして、校点本の方がよいと思われる。

(20) 「中国の八大小説」(昭和四十年、平凡社刊)頁27、伊藤漱平氏の一文では、李漁などがこの典型だとしてこの点を指摘されている。

(21) 精しくは、周鈞韜氏「吳晗对《金瓶梅》作者」王世貞說“的否定不能成立”(江蘇社会科学、一九九一年一月)または、顧国瑞氏「《金瓶梅》中的三個明代人」探討《金瓶梅》成書年代与作者問題的又一途径(劉輝・杜維沫編「金瓶梅論文集」齐鲁書社一九八八年刊所収)を参照されたい。

(22) 拙稿「『金瓶梅』補服考」(「長崎大学教養部紀要」第三十一卷一号、平成二年七月)ならびに拙稿「『金瓶梅』執筆時代の推定」(「長崎大学教養部紀要」第三十五卷一号、平成六年七月)

月)を参照されたい。

(23) 拙稿「『金瓶梅』十七回に投影された史実―宇文虚中の上奏文より見た―」(『漢学研究』第六卷第一期所収、民国七十七年六月)

(24) 前掲論文(注2) 参照)を参照されたい。

(25) 同上奏文は、「楊忠愍集」巻一の外に、同卷四王世貞による「楊繼盛行状文」の中に引用されているもの、「明経世文編」巻二百九十三「早誅奸險巧佞賊臣疏」に見えるもの、更に「明史」巻二百九楊繼盛伝中に引用されたものとさまざまな資料において見ることができ、各々字句に精粗があり、みな微妙に異なる。ここは、「楊忠愍集」巻一によった。

(26) 小野忍・千田九一訳「金瓶梅」(平凡社版)の注には、「河湟は、黄河および湟水両河流域の地。『河湟に議を失い云々』とは、河湟に進出して来た吐蕃(チベット族)と和議を講ずることに失敗して、遼を伐つことを主張し、河湟の三州(湟・鄯・廓の三州。甘肅西寧府境内にあり)を吐蕃に割いた、という意であろう。」とあるが、吐蕃に湟州等を渡したのは、一一〇一年のことであり、時期的に、次に言う金の宋への侵攻開始の時と合わない。また、「三郡を割く」と割讓の割という字を使っているところからも推察するに、これは、金への三鎮割讓をさし、三郡は三鎮の誤りと考えられる。

(27) 「宋史」卷四百七十二蔡攸伝「蔡攸……与王黼得預宮中秘戲、或待曲宴、則短衫窄袴、塗抹青紅、雜倡優侏儒、多道市井淫媒譁浪語、以蠱帝心」

(28) 「楊忠愍集」卷四に見える同行状文の文末には、「隆慶戊辰冬十二月同年生吳郡王世貞謹撰」とある。

(29) 拙稿「『金瓶梅』に於ける諷刺と洒落について」(『国語と教育』第十九号、一九九四年)を参照されたい。

(30) 卜鍵「金瓶梅作者李開先考」(甘肅人民出版社、一九八八年)

(附記)

本稿は、一九九五年度文部省科学研究補助金による研究「戯曲資料から見た金瓶梅の作者とその描かれた時代についての研究」の研究成果の一部である。

(一九九五年十月三十一日受理)